

てし 豊島の植生回復と生物多様性について

公害調停条項の前文には「豊島が瀬戸内海国立公園という美しい自然の中でこれに相応しい姿を現すことを切望する」と明記されており、島の人々は廃棄物の搬出処理だけでなく、自然の景観についても原状回復を強く願っています。

豊島を含む瀬戸内一帯は温暖な気候であり、伐採などの攪乱が100年以上なければ、シイ・カシ類などの照葉樹が優占する森林が形成されると言われており、その面影は檍（壇）山頂上付近に残されたスダジイ林に見ることができます。

しかし、これは例外的な存在であり、瀬戸内沿岸の大部分は、古くから新炭林や落葉採取の場として人々の生活を支え、穏やかな攪乱を受けながら植生が維持されてきました。これを「代償植生」と呼び、豊島ではアカマツやコナラ、ウバメガシが上層を優占し、その下層にはツツジ類やヒサカキ、シャシャンボなどの低木類が繁茂しています。そして、このような植生が豊島の人々の記憶にある取り戻したい自然景観ではないでしょうか。

では現状はどうでしょうか？ 柚（ゆ）の浜北側、つまり水ヶ浦側の処分地から南東に山の稜線を越えた地は、1970年頃から山腹が切削されつつ表土が採取し尽くされたあと、40年以上も放置されています。一見すると緑が回復しているように見えます。

しかし、調査すると種の多様性は極めて低く、植生遷移もほとんど進んでいない実態が明らかになりました。周囲の斜面に分布しているコナラ、ヤマザクラなどの高木性樹種や、早春を彩るコバノミツバツツジもほとんど分布ていません。このことは産廃処理跡地を放置しても多様性豊かな元の自然景観は戻ってこないことを示唆しています。

では、どうすればよいでしょうか。われわれが行うべきことは「自然を造成する」のではなく、植生遷移の流れに沿って自然がゆっくり回復できるように補助してあげることです。そのためには多種多様な埋土種子を含んだ周辺の表土を撒き出したり、風散布や鳥散布で供給された種子が発芽・定着できる環境を整備する必要があります。（嶋一徹／しま かずとう）



嶋 一徹（しま かずとう）教授
岡山大学大学院 環境生命科学研究科 環境生態学講座

専門は森林生態学、綠化工学。
山火事や大規模伐採などの人為的
かく乱を受けた生態系の劣化メカニズムの解明と修復手法の確立の
ほか、有機性廃棄物の綠農地利用
による土壤劣化防止にも取り組んでいます。

香川県豊島の有害産業廃棄物不法
投棄現場の跡地では、2015年
より植生回復のための調査・指導
を行なっている。

写真：2016年6月5日
第20回「アースデイかがわ in 豊島」
植生回復ワークショップにて

維持・回復すべき豊島の代表的植物



クスノキ

植生遷移が進んだ森林に出現する常緑樹です。
鳥が実を好むため、種子は広範囲に拡散されます。葉は揮発成分に富み爽やかな香りです。



コナラ

日当たりの良い雑木林に生える落葉樹で、切れ込みのある葉が特徴です。薪やシイタケの木
ダ木として、人びとに古くから利用されてきました。



クロマツ

日当たりのよい海岸や斜面上に分布して、瀬戸内の景観を特徴づけています。しかし林床に十分な光が届かないと発芽・生育ができないため、荒廃地での更新には刈り作業が必要です。



トベラ

常緑で葉は縁が丸まっており、耐乾性・耐塩性
が高く、海岸沿いまで広く分布しています。
実は鳥が好み、種子を広く散布します。



アカメガシワ

新芽が赤く、大きな葉が特徴的な落葉樹です。
土壤条件が劣悪でも生長できる先駆樹種で、山
火事跡地などにも広く分布しています。



コバノミツバツツジ

落葉低木で早春に葉が展葉する前に淡紫色の花
を咲かせ、豊島では、春に花を見楽しんでいました。
種子が非常に小さく成長も遅いため、荒
廃地での更新は容易ではありません。

てし
認定NPO法人瀬戸内オリーブ基金
「豊島・ゆたかなふるさと100年プロジェクト」

国立公園の原状回復事業 植生回復の作業について



